

最終講義

「私の哲学研究：意味をめぐる問題」

1999年3月13日（土） 立松弘孝

ところで、本日の私のテーマですが、仮の題目でもよいと言うことで「私の哲学研究：意味をめぐる問題」という、正直、はなはだ曖昧な表題になっています。ですから、言語学的な意味論の話かと、想像された方もおられるかも知れませんが、そうではありません。まず「私の哲学研究」という部分については、口頭では話しにくいために、文書にして配付した「私の略歴」をご覧になれば分かるように、「人生とは何か、家族とは何か」といった、いわば「人生論的な問題」が哲学研究への最初の動機になり、宗教や文学も含めて、いろんな本を乱読しました。哲学書に限定しなすと、なにぶん当時は滅多に新刊書が出版されない時代ですから、ほとんど古本を購入して読みました。ということは 大正時代から昭和にかけて日本でも流行して、研究書も多数出版されていた「新カント学派」の書物に親しむことになり、その結果、南山の卒論では「カントの認識論」をテーマに選びました。カントはその『論理学講義』の中で、哲学の根本問題として、まず「私は何を知らうるか、私は何を為すべきか、私は何を望むことを許されるか」という3問題を挙げた上で、これら3問題を通して、常に問われているのは「人間とは何か」という究極の問題である、と声明しました。私はカントのこの言葉に影響されて、まず認識論の研究へ導かれ さらにフッサール現象学の研究へ進みました。

勿論「人間とは何か」という問題は、哲学はおろか、既に各民族の神話の中でも、人類誕生の物語として、それなりに問われていた古くして新しい根本問題です。例えばプラトンも「自己探求のない人生は生きるに値しない」と述べていました。しかしこの問題が、いわゆる「哲学的人間学」という名称で特に盛んに研究されるようになったのは、第1次世界大戦後のことであり、もっと特定して言えば、現象学の代表者の一人である M. シューラーが 1928 年に出版した『宇宙における人間の地位』という書物の影響に拠る所が大きいと言えます。周知の通り 19 世紀末になりますと、ヨーロッパの知識人の間で、伝統的なヨーロッパの人間観や科学的思考に対する危惧の念や危機感が芽生え始めました。そしてその危機の予感が如実に現実化したのが、第1次大戦の勃発とその悲惨な結末でした。フッサールも最晩年の 1930 年代の後半にはヨーロッパ的人間性やヨーロッパ諸科学の危機について注目すべき講演原稿や著作を書き残しています。しかも、こうした人間性の危機は、当時に劣らず現在も憂慮すべき状態にあります。その証しは日本でも、オウム真理教の犯罪や神戸の小学生による殺人事件など、教え切れぬほど見出せます。最近のドイツの出版物を見ても『生きることの意味について』というような題名の学術的な書物がか なり多数出版されており、それらの著作では「意味の危機 sinnkrise」とか「意味の喪失」などという表現がしばしば使われています。

日本の「小・中学校の4割で学級崩壊」などという事態も、小中学生の多くが「学ぶことの意味を見失っていること」の証しだと言えます。勿論「なぜその意味を見失ったのか」、その理由を究明しなければなりませんが。とにかく私は今後とも、こういう問題も含めて「意味の問題」を考えて行く積もりです。ともあれ「意味をめぐる問題」という表題で、今日ここで特に考察したいのは＜我々の日常的な認識と行動、及び、それによって成り立つ生活世界ないしは環境世界において意味が果たす役割＞についてです。結論を先に言えば、＜我々は

単なる物理的諸事物の世界の中で、外界から単に受動的に刺激を受け、それに機械的に反応して、生きているのではなく、様々な主観的および客観的な意味をもつ諸事物や出来事の世界の中で生きているのだ」ということ、換言すれば「我々は精神的・文化的な意味のネットワークの中で認識し行動しながら生活している」のであり、しかも「これらの意味の多くは我々自身が諸事物や出来事に与えたか、もしくは我々自身が所属する文化的な習慣や伝統に則して受け取り理解したものである」ということです。従って、この講義では「意味」という語を、文脈に応じて「言葉や行動が表示する指示内容」だけではなく「発言や行動・行為が示そうとする意図や目的」および「物事や行為や、更に生活全体がもつ価値や重要性」を示すためにも使います。そしてまた、このことと関連して、諸対象に意味を与え、あるいは伝統的に諸対象に与えられている意味を「知覚理解する志向的：intentionalな意識作用」の働きについても若干言及することになります。〈志向性 = intentionality〉という語は、現象学の専門用語としては、様々な機能と語義を合意していますが、要するに「知覚などの意識作用が何らかの対象に向かい、そしてそれに意味を付与したり、理解したりする働き」のことです。現象学者のフッサールはこのように「意識主観が対象に意味付与すること」を「対象を構成する = constitute」とも言います。近世の西洋哲学では通常、このような意識作用を行う能力の中樞を「理性」=ギリシャ語で nous と呼んでいます。フッサールは彼の中期の主著『イデー』第1巻の中で、nous を「意味 sinn」と訳しています。この訳は、例えばゲーテが、『ファウスト』の中で、ファウスト博士に「ロゴス」を「行為 Tat」と訳させているのと同様、かなり例外的な訳語だと思えますが、しかし「意識主観による対象への意味付与」を重視するフッサールには似つかわしい訳し方だとも言えます。なお、nous と同系統の動詞 noein は「見る、および考える」という心の働きを意味しています。英語の sense に「感覚」と「意味」の両義があるのは、「感覚されるものには意味が与えられる」と考えたからでしょうか。因みに、meaning の語源に当たるインド・ヨーロッパ基礎語の maino には「意見とか意図」などの意味があり、また、これと同系統の古代アイルランド語の mian は「意欲」という意味だそうですが、meaning という語も元は主に「意図とか目的」という意味で使われていました。現象学で言う〈志向 = intention〉も Avicenna らのアラビア哲学を12世紀にラテン語訳した際に、「語義や観念」を意味するアラビア語の mana の訳語に当てられた為、それ以来、本来の語義である「意図や目的」のほかに「知性による認識作用とその形成物」に対しても、intentio という語が使われるようになったとされています。フッサールが、認識作用を中心とする意識作用の根本的な特性を表すのに intention, intentionality という術語を採用したについては、その背後にこのような用語法の推移が蓄積されていたわけです。そういえば日本語の「意識」や「意味」の「意」も、仏教の用語としては、サンスクリット語の manas=soul の訳語で、特に「対象を総括的に認識する心の働き」を意味するとされています。これらのことから推察されるように、フッサールも強調した通り「意味の成立と存在」は「意味を認識する主観の意識作用ないしは心の働き」と不可分な相関関係にある、と認めざるを得ません。前置きめいた話はこの位にして、これからは幾つかの論点に分けて、本題に入ります。まず最初は、天才的な生物学者 Jacob von Uexkull (1864-1944) の邦訳の書名『生物から見た世界』に依拠して「動物の環境世界における意味の役割」について簡単にお話しします。彼によれば、動物が実際に生活している環境世界は、動物の知覚世界 = 動物が merken するすべてのものと、作用世界 = 動物が行うすべての wirken とが統合された世界であり、

しかも「動物の種類によって、それぞれ環境世界が異なる」という点が特に重要な指摘です。例えば、視覚も聴覚も味覚もないダニの環境世界、生活世界が、それらの能力をもつ動物と著しく異なることは明白です。別の例をあげれば、例えばミツバチは主として星形や十字形の開いた花に好んでとまり、閉じた形のは避けるとのことです。つまり彼らにとっては蜜を吸いやすい開いた花だけに意味があつて、雷は問題にならないからです。意外なことに、ミツバチは赤色盲のうえ、黄色とだいたい色と緑色の区別も出来かねるそうです。従つて昆虫学者の間では、こういう事情で自然界には赤い花が少ないのだ、とする説が有力のようです。実際、牧野富太郎氏の『日本植物図鑑』を見ても、殆どの花が白、黄、紫色をしていて、赤や紅色の花は僅かに10%足らずです。ともあれ、ユクスキュルは「環境世界の研究では、意味の関係のみが、唯一の確実な Wegweiser（道案内）である」と言い、「環境世界は、それぞれ、そのすべての部分が主体に対する意味によって支配された、まとまった統一体を形成している」と断言して、だからこそ「意味の問題は、あらゆる生物の場合まず第一に取り上げるべき課題だ」と主張しています。彼の令息で心身医学者の Thure von Uexkull (1908-) も「環境世界の研究は、その中心に箇々の主体を置いて、それらの主体が自己の環境内の事物や出来事を如何に体験しているのかを探求するのである」と解説しています。更にヤコブの親友であった哲学者のカッシーラーはその最後の著書『人間』の第2章で、ヤコブの学説を紹介して「あらゆる生物に対して同一なく物」という、絶対的な実在が存在していると仮定するのは、はなはだ素朴な独断論であろう。reality は唯一かつ同質のものではない。それは限りなく多様なものであり、生物の異なった種類の数と同数の異なった形態と種類をもつものである。各生物はいわばモナド的存在である」と述べています。以上で紹介した論点は、私自身も「意味の問題」を検討する上で、大いに重視しています。とは言え、少なくとも下等動物にとって有意味なものは、その種全体にとって共通に「有意味なもの」として、遺伝的・本能的に特定されていますから、この点に人間の場合との本質的な違いがあります。それゆえ哲学的人間学のシェーラーやプレスナー（フッセルの弟子の一人）やロータッカーたちは、動物環境世界に拘束されている（umweltgebunden）に対して、人間は世界に対して開かれている（weltoffen）のだから、この点に両者の根本的な違いがあるのだ、と強調します。彼らは「世界」と「環境世界」を対立概念のように区別していますが、しかしフッセルは例えば『イデー』の第2巻（218）などで「私の世界は私の環境世界である、即ち物理的な世界ではなく、私および我々の志向的生の主題となる世界である」と言明しています。ただし、この差は「環境世界」という語の理解の差だと思います。因みにフッセルは、日常的生活世界、物理学的世界、幾何学的な理念的世界など、それぞれの世界に固有の存在構造を分析し記述しています。では次に、認識作用について「認識の本質的な機能は何よりもまず事物や出来事の＜意味＞を把握することにある」という点について、主に心理学者の見解を援用して、解説します。ただし認識全般について話す時間はありませんから、例えば Teilhard de chardin が「生のすべては見ることにある」とまで重視する「見る作用＝視知覚」に限定して話します。一般に「見る」とは「誰かが或物を何かとして見る」という構造を持っており、この「何か」に当たる部分がまさに「意味」に他なりません。フッセルなどは、この「意味」に相当する要素を、事物の「本質」とも呼び、日常「何かを見る」場合にさえ、我々は既にそれなりに一種の「本質直観」をしているのだ、と言います。失語症の研究で有名なゴールドシュタインは、初期のフッセルの用語を借用して、健忘性失語症の患者は、実は言葉そ

のものを失っているのではなく、言葉を正常に使うために必要不可欠な「抽象的な範疇的態度」を採れなくなったがために、すべての言葉をまるで固有名詞のようにしか使えなくなっているのだ、と説明し、「物の名を言うには範疇的態度がまず必要である」と強調しています。既に W. James も「私の 5 感は厖大な数の外界の事物を捉えるが、そのすべてが私の経験とはならない。なぜなら、そのすべてが私の関心事ではないからだ。自ら進んで注意を向ける物事だけが自分の経験になる のであり、その選択的関心がなければ、経験はただの混沌に過ぎない」と断定していました。この「選択的関心」という心理的機能を、フッセルと同様、私も重視しています。現代の心理学者（『光と視覚』の著者）c. c. Mueller と M. Rodolph も、我々の眼は不必要なものを除外し、過去の経験と知識や、未来への期待と意図に照らして、有意味な物事だけを見ようとすることを実証した上で、視覚の総合過程を「意味の追求」と呼んでいます。『知覚の心理学』の著者バーノンも、人間は子供の頃から注意する必要のない物を習慣的に見過ごす傾向のあることなどを例示した上で、知覚の発達の第 1 段階は、眼の前の対象の形を知覚することであるが、しかし何かその形の「本質」を知覚するまでは満足できない、と主張しています。ゲシュタルト心理学が実証した通り、無意味な図形や一連の音声よりも、有意味な図形や音声の方が速く容易に知覚され記憶されることは、我々自身が常に経験しています。” cognition and Reality” 1976 の著者 U. Neisser も、知覚はもともと選択的であり、我々は事象の表面的な特徴よりも、むしろ事象の「意味」を知覚し「構成」しているのだと、フッセルと良く似た主張もしています。また、フッセルと若干の交流があったヤスバースも、若い頃の代表作『精神病理学総論』の中で、知覚は感覚刺激をただ単に機械的に模写するのではなく、同時に「対象の意味の知覚」であることや、人々が実際に生活している具体的な世界は、それぞれの伝統の中で歴史的に生成した主観的かつ客観的な世界であることを指摘し、そしてさらに、純粹に客観的な世界があるとしても、それは「人間がその時どきに彼の世界を自分のために築く材料」にすぎない、としています。特に『現象学的心理学』1975 の著者耳. Keen ともなりますと「我々は経験する者であり、意味を与え、意味を受け取る者である。我々が経験するということは、もろもろの事物や出来事に意味を与えていく過程である」と言い、さらに「世界とは、相互に関連し合う種々の意味の複合体である」とまで主張します。さらに彼は「ヒューマニズムの観点は、意識を人間の中心に置く。なぜなら意識こそが人間の生活を最も劇的に支配しているからである」とも断言しています。そう言えば、カッシーラーもその著『人間』の第 1 章で「自然的なものは、その客観的な特性によって記述することができるが、しかし人間はその意識によってのみ記述され定義されるのである」と述べています。カッシーラーは『シンボル形式の哲学』の第 3 巻『認識の現象学』の中で、知覚についても詳しく論述していますが、その要点は次の通りです。即ち彼によれば 感覚主義が認識の最高の規範と見なしてきた「全く個体的な知覚」というようなものは、知覚が言葉の支えを失った時に現れる病理学的な現象に他なりません。もちろん知覚体験には感覚的な体験の側面も含まれてはいますが、しかし、知覚体験は最初から「或る特定の意味」を懐胎しているのであり（彼の用語では symbolische pragnanz）、いわば最初から「意味の領域」へ生まれて来ると、言えます。ここから彼は、さらに一步踏み込んで「意味の世界に生まれ、意味の世界に生きる知覚」と「意味の世界である言語の世界」との間の相関関係の問題へ、考察の歩みを進めます。そこで私も今度は「知覚と言葉との関係」言及することにします。我々が日常「何か」を知覚する場合、例えば、この花は「ろう梅」

だとか「満作」だとか、その物の名前が分かれば 通常それで満足します。しかし勿論、言葉は極めて広範囲にわたって、我々人間の認識や感情に決定的な影響を与えています。ですから近代言語学を確立した功労者の一人である W.von Humboldt (1767-1835) は、人間はもっぱら 言語の中で考えたり感じたりして生活しているのであるから、「言語は思想を形成する organ であり、energeia である」ことを強調し、そしてさらに「客観的なものは、単純な所与ではなく、つねに主観的に獲得されるべきものであり、言語こそが種々の感覚印象に形を与えて、それらを客観化するのだ」と主張します。つまり我々は常に言語を媒介にして、世界を眺め概念的に理解しているわけですから、フンボルトは、母語が違えば当然、世界の見方、森羅万象を 分割する仕方も異なることを指摘して、いわゆる「言語相対主義」を唱えました。このような言語観に立って、ドイツの詩人 stefan George (1868-1933) は「言葉」という題名の詩の中で「言葉なきところ、物またなし」 ”Kein ding sei wo das wort gebricht” と詠いました。この詩に深く共鳴して「事物に存在を与える言葉」についての 形而上学的な思索を展開して「言葉は存在の真理 aletheia の住家である」(=存在が顕現する場) と論じたのが、あのハイデガーでした。こういう言語観は現在の日本の言語学や記号論においても、広く支持されています。例えば 鈴木孝夫氏『ことばと文化』は「物という存在が先ずあって、それにあたかもレッテルを貼るような具合に、言葉が付 けられるのではなく、逆に言葉が物をあらしめている」のだ、という考え方を支持して、「言葉というものは、混沌とした、連続的で切れ目のない素材の世界に、人間の見地から人間にとって有意義と思われる仕方で、虚構の分節を与え そして分類する働きを担っている」と述べ、さらに、事物や対象は「意外にも認識の主体である人間の必要が作り出した、非常に主観性の強いものである」と言明しています。池上嘉彦氏『記号論への招待』も「人間は[自然的な対象も 含めて]自分のまわりの事物に対して、意味づけをしないではいられない存在であり、しかもその際の意味づけは、すべて人間である自らとの関連で行われている」ことを認め、そして「人間の<文化>的な営みは、まず第1に人間にとって<意味あるもの>を創り出す営みである」と述べています。しかも彼は、そうした「言語」と「文化」の間の著しい平行現象のすべてが、人間の「精神」の営みによって生み出されたものだ、という点を特に強調しています。ここで彼の言う「精神」は「志向的な意識の働き」と言い換えても良いと思います。科学哲学の分野でも、例えば野家さんが訳された『科学論序説』(原書は1977年刊)の著者 Harold Brown は概略、次のように述べています。即ち、新しい科学哲学の主張によれば、知覚といえども純粋な事実を与える訳ではなく、我々が対象を<何として>知覚する かを決定するに当たって、根本的な役割を果たすのは、我々が既に抱いている知識や信念や理論であり、私が対象を何 かくとして>見ること、それが有意味な知覚であり、知識の一部となりうるのは、我々が見ているものの意味だけであると、このように主張しています。そもそも英語で fact と言え、ば、「何々する、とか、何かを作る・創作する」という語義のラテン語 facere, facio を語源に持つわけですから、もともと人間と全く無関係に、純粋に客観的に、いわば<それ自体>として存在するような fact はありえない、とも言えそうです。これまで私は、生物学者や心理学者の見解をいろいろ紹介して、話を進めて来ましたが、その理由は、我々人間にとっての「事物の在り方」を解明する上で「意味が果たす重要な役割」を強調したフッサールの考え方の妥当性を、哲学 以外の科学の眼を通して、再検討し補強するためでした。彼にとっては「認識体験と意味と対象との相関関係」を究明 することが認識論研究の根本問題でした。従って彼の「認識

論が眼の前に持ちうるのは、意識の相関者としての存在だけ」であり (Logos I, 300)、彼の現象学は「あらゆる種類の客観を、意識の客観としてのみ取り扱う」こととなります。そして彼は「意識との相関関係における超越的なもの一般の存在の意味と、その存在の仕方」に関する問題のことを「超越論的な問題」と呼んだわけですから (Hua IX, 289)。しかしそれにしても、これまでに紹介した諸説はどれも、余りにも観念論的すぎるという印象を与えるのではないかと思います。事実フッサール自身、自分の現象学を「超越論的観念論」とか「現象学的観念論」と呼んでいます。しかしそれと同時に彼は「現象学的観念論は、実在世界の現実的な存在を単なる仮象 *schein* であるかのように見なして、それを否定するのではなく、現象学的観念論の唯一の課題と仕事は、この世界の意味を、もっと正確に言えば、この世界が、誰にとっても現実に存在する世界として妥当している意味を、解明することである」(Hua V, 152) と説明しています。彼によれば、世界の存在は意識に対して必然的に超越的であり続けますが、しかし、このことは「超越的な物のすべてが意識生活と不可分であり、意識生活の中でのみ構成される」という事情を少しも変えはしません。世界の現実性と超越性も、それと相関的な意識経験の地平を開示することによってのみ、初めて究極的に解明されるのだと、そう彼は考えています。彼はまた当然のことながら「私が知覚しなかった物、今後も知覚できない物も存在する」ことも認めていますし、彼が「意識主観が対象を構成する」と言う場合も、彼はそれと同時に「対象自身が意識主観に自らを提示する」とも言い、その提示を受け取る「受容性」と「受動性」がなければ、意識作用の「能動性」も働きえないことも、はっきり認めています。こういう点で、フッサールの観念論は、彼自身も主張したように、従来の語義での実在論をも包含しうるような、独特の観念論だとも言えます。彼は「認識の面から見れば、我々人間にとって、我々自身の存在が、世界の存在に先立つが、しかし存在の現実面から見れば、そうではない」(Hua VI, 266) と言明していますが、こういう点にも、実在論的な傾向を認めようと思います。言うまでもなく、46億年も前に誕生したとされる、この地球は勿論のこと、我々がいま山や海と呼んでいる物それ自体は、人間と関係なく太古の昔から存在していました。しかしそれらを海や山、あるいは、それらの一部を「入江」とか「峠」と名付けて、特定の意味を与え、そうすることによって、他のものと区別したのは、やはり生活の必要に応じた、我々人間の「認識能力」だと、言わざるをえません。もっと分かり易い例は「星座」の存在です。例えば「オリオン星座」に属する星たちのうち、Betelgeuse と Rigel は 2600兆キロも離れていて、本来この2つの星の間には何ら特別の関係はありません。それにも拘わらず、これらの星を1つの星座にまとめて「オリオン星座」と名付けたのは、古代ギリシャの天文学者たちです。どの星座の存在も、幾つかの星を選択して集合・配列した人間の精神的能力によって構成された訳です。ですから、新フンボルト学派の言語学者 L. weisgerber の用語で言えば、星座は、外界の自然自体と人間の心の内界との間に介在する「精神的な中間世界」に属しているのだ、と言えます。予め何らかの物理的物体が存在しているから、我々がそれに特定の呼び名と意味を付与して、それは何々であると認識しうる訳ですが、しかし逆に言えば、我々がそのように認識するからこそ、我々にとって、それらの物体が現実に存在しうるのだ、とも言えるのではないのでしょうか。例えばヤスバースは、その著『真理論』の中で「我々に意識され、体験されて、対象となるものだけが、我々にとっての存在であり、いかなる仕方によっても意識されないものは、我々にとっては無きに等しい」と断言していますし、哲学的人間学の分野で有名なゲーレンも「我々にとって存在していると

言えるのは、我々と何らかの関わりを持つ諸事物だけである」と述べています（『人間学の探求』）。既に半世紀近くも前に「量子論」と「量子力学」で有名な物理学者のハイゼンベルクは「自然科学においても、研究の対象はもはや自然自体ではなく、人間の質問にかけられた自然であり、自然科学は常に人間を既に前提している。数式さえももはや自然を模写せず自然についての我々の知識を模写 abbildenしているのだ」という趣旨のことを述べていました（『現代物理学の自然像』）。繰り返しますが「我々にとって現実に存在していると言えるのは、我々自身が何らかの仕方で認識した事柄だけである」という考え方から、最近の物理学者の間では、これからの宇宙論として「人間原理の宇宙論」を提唱する人が増えつつあるように思います（松田卓也『これからの宇宙論』）。彼らが、人間という知性的存在者を軸にして、宇宙の存在を見直すべきだとする理由は、「宇宙」をまさに「宇宙」として認識するのは、人間の知性であり、人間が そのように認識しなければ、「宇宙」も「あつて無きがことにももの」になるからです。こうゆう考え方は、悪しき意味での「人間中心主義」とは区別して然るべきだと思います。話しがだいぶ長くなりましたので、この辺で終わりにしますが、最後に改めて強調して置きたいのは、我々は自分で 自分の環境世界・生活世界を形成しうる存在者でもあるということ、つまり、自分の生活世界に自分なりに意味を付与して、有意義なものに解釈することこそ、人間固有の創造的な行為であり、そしてまさにこの点に人間の「精神の自由と各自の個性」が発揮されるのだ、ということです。我々人間は、各自の責任で自分が選んだ考え方と生き方に応じて各自の人生を築いて行く訳です。現在の日本では遺憾なことに、この「各自の責任」という面が軽視され過ぎています。ただし、このような面を強調したからといって、我々が社会的動物であり、従って、共同体の中で多くの他者と共存し互いに支え、支えられながら、生きていることを、決して軽視している訳ではありません。私は「人間は汝において我になる」 Der Mensch wird am Du zum Ich. ”という M. Buber の言葉に宿る深い含蓄にも、常に耳を傾けながら、これから始まる第2の人生を有意義に生きていく積もりです。準備不足の拙い話でしたが、ご静聴いただき有り難うございました。